

クローズアップ：ウクライナ侵攻 芸術家、深まる分断 露出身者、公演キャンセル相次ぐ（毎日新聞 2022年3月16日東京朝刊、電子版）

<https://mainichi.jp/articles/20220316/ddm/003/030/080000c>

- ◇意見表明、求める西欧
- ◇露「国家に奉仕」根強く
- ◇日本、政治権力と距離

◇露「国家に奉仕」根強く

世界でロシアの芸術界に厳しい目が向けられる中、ロシアの芸術家たちの声はなかなか届かない。ロシア演劇史を研究する明治大専任講師の伊藤愉（まさる）氏は「ロシアの劇場はほとんどが国公立で、国や自治体からの助成金で運営費をまかっている。反体制的な発言をすると助成金を止められ、活動できなくなる」と分析する。帝政ロシア時代から、国がオペラやバレエなどの芸術を保護し、発展させてきた歴史があり、伊藤氏は「ロシアの政治家には『芸術家は国家に奉仕するもの』という考え方が根強い」とも話す。

多様な民族がひしめく周辺地域の事情も絡む。ゲルギエフ氏はオセチア地方を拠点とするオセット人だが、2008年にジョージア（当時はグルジア）からの分離独立を唱える南オセチアを巡り、ロシアとジョージアの紛争に発展した。東欧に詳しい音楽学者の伊東信宏大阪大教授は「ゲルギエフ氏はオセット人としてロシアに恩義を感じている。自身のルーツに関わることなので、プーチン氏を批判しろ、と迫るのは酷な面がある」と説明する。

ただ、ロシアでもウクライナ侵攻直後は、芸術家から批判の声が上がった。伊藤氏によると、モスクワの演劇の拠点「メイエルホリド演劇センター」のエレーナ・コワルスカヤ監督は2月24日、「人殺しのために働き、人殺しから給料をもらうことはできない」とプーチン氏を批判し、辞任を表明した。また、ロシアの演劇批評家が即時停戦を求める署名を募ったところ、サチリコン劇場のコンスタンチン・ライキン芸術監督や、ボリショイ劇場支配人のウラジーミル・ウリン氏ら大物の演劇人から続々と署名が集まった。ウリン氏は14年にロシアがクリミアへ侵攻した際は支持しており、今回は正反対の意思を表明した格好だ。

ところが、プーチン氏が3月4日、ロシア軍に関する「偽情報」や「信用失墜を狙った情報」を広める行為を禁止する法案に署名すると、SNS上に書き込まれたウクライナ侵攻に抗議する声明などは一斉に削除され、芸術家たちの声はかき消されたという。伊藤氏は「反体制的な言論は弾圧され、若手の知識人、文化人も国外に脱出している。ロシア文化がロシア政府によって破壊されている」と嘆く。